

---

# 二人、屋上で

赤神幽霊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人、屋上で

### 【Nコード】

N4435C

### 【作者名】

赤神幽霊

### 【あらすじ】

幽霊を認識できるせりと幽霊であるなずなどの、放課後の屋上でのやりとり。

その日の授業を終えた私はすぐに帰宅せず、屋上へ直行した。

階段をゆつくりと登り、立ち入り禁止と書かれた張り紙を無視して屋上への扉を開く。

雨がしんと降り注ぐ中、傘を差さずに屋上に佇んでいる同い年くらいの少女の姿を見つけた。しかし雨の霰は彼女の体を通して、そのまま地面を跳ねる。

彼女は一日中ここにいて、ここにいて、空をぼーっと眺めていたり、校庭を、そこにいる生徒達を羨ましそうに見ていたり、どこか遠くを見つめている。先生は彼女を注意しない。それ以前に、誰も彼女の存在に気づかない。

彼女はもうすでにこの世の住民ではなかった。いわゆる幽霊というやつだ。

どうしてなのか理由は知らないけれど、昔から私にはそういうものを見ることができた。彼女もその例に洩れなかった。

本来なら彼女のことを知らずに過ごしていただろう。だけど私は二ヶ月ほど前、とある事情で屋上に行った。その時知ったのだ。彼女の存在を。

制服姿の彼女はフェンスの向こう側に腰かけて足をぶらぶらさせていた。制服はこの学校のものだ。

傘をあえて差さずに私はそのすぐ後ろに歩み寄り、フェンス越しに声をかけた。

「なずな」

「勉強お疲れ様。せり」

彼女　なずなは、特に驚いた様子もなくこちらを振り向いた。

その表情は、嬉しそうにも、悲しそうにも、どちらにも取れるものだった。

私はその理由を知っている。私がここに来ることを、なずながあ

まり良く思っていないということも。知っていながら、私はここへやって来る。

「なすなもそれを拒みはしなかった。」

「今日も何かを見ていたの？」

「ええ。私にはそれしかできないから」

「そっか……」

それしかできない。私はその言葉に暗い気持ちになった。なすなはこの屋上から動くことができないのだ。この学校に未練を残してここから飛んだから。そのことが彼女をこの場所に縛りつけていた。「もう、どうしてせりが落ち込むのよ」

「いじめん……」

「謝らないの。せり、何度も言うけどさあ、もう少し自分に自信持ちなよ。ほら、胸張って」

「う、うん……」

「で、今日はどうしたの？ また、いじめられたの？」  
俯いたままこくと頷く。

その拍子に、雨に紛れて雨とは違う透明な滴が床に落ちた。

「せり……。いいわよ、泣いて。思いつきり、ね？」

私は、その言葉に甘えた……。

しばらくして落ち着きを取り戻すと、

「ごめんね。私、もう死んでるから、あなたに触れることができない。抱きしめてあげられない。ごめんね……」

フェンスをすり抜けて、私を包み込むようにしているなすなは耳元でそう謝っていた。

私はまたやってしまったと後悔した。

「ありがとう、なすな。いつも、抱きしめてくれて」

「せり……」

声をかけると彼女は笑った。それは、とても淡く儂い微笑みだった……。

「そろそろ帰った方がいいよ」

雨は止やんでいた。あたりは暗く、眼下の校庭に人影は見当たらない。

私はなすなの言うことに従うことにした。

「また、来ていい……?」

「来ない方がいいよ。でも、私は拒まないから。もしも辛くなったら、来ていいよ。いじめに耐えられなくて死んだ私が言うのも変だけれど、できれば死なないでね。あなたはそうしようとした前科があるんだから、一応釘をさしておくわ。もしもそんなことになったら、私が悲しいし。あと、飛び降り自殺は痛いからあまりお勧めできません。これ私の体験談。今の私から言っておいてあげられるのはこのくらい。『また明日ね』、せり」

私は、後ろ髪を引かれながらも屋上を後にした。

また明日。私の去り際になすながかけてくれた、その言葉を反芻しながら……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4435c/>

---

二人、屋上で

2010年12月14日18時58分発行